ねじりはちまき

4 月　晴明　穀雨の月になりました。

4 月 4 日晴明です。6 日春の全国交通安全運動です。11 日メートル法公布記念日で、19 日穀雨です。29 日昭和の日となっております。

4 月 8 日はお釈迦様の生まれた日で『花まつり』の名で知られていますが、『灌仏会』『仏生会』とも言われ各寺院では祝いの法会が行われます。月遅れの 5 月に行うところもあります。この日いろいろな花で飾った『花御堂』という小さな御堂が設けられその中央の水盤の上にお釈迦様の立像が安置されます。参拝者は『花御堂』に祀られたお釈迦像に竹の柄杓で甘茶を注ぎ、またこの甘茶を飲んで無病息災を祈ります。又、家に持ち帰り家族で飲むと丈夫になる、目につけると目が良くなると言われています。お仕事も大切ですが美しい春を謳歌して下さい。

幸田　常一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

<会社近況>

ただいま、本宮市と郡山市の現場をお世話になっております。

雨風もあり春の嵐になる日もありますが、天気の模様をみながら作業を進めております。

<4月>　住まいの点検🏠

気温が上がり、春らしい日が増えました。まもなくお花見の季節ですね。お花見は桜の木の下でぜひ楽しみたいものです。日差しも出てきますので、お掃除もしやすくなります。残っていた雪が解けてゴミを探しやすくなったり、家の劣化した部分もチェックできます。窓ガラスの汚れや網戸の破損箇所も合わせてチェックするのもおすすめです。

<そら豆>

さやを空に向け実ることから『空豆』と書くそうです。選び方はさやの色が濃い緑色で、筋の部分が茶色に変色していないものが良いらしく、空気に触れると時間の経過と共に風味が落ちるので、できるだけさやに入ったものを選ぶと良いそうです。一般的な食べ方は塩ゆで。塩ゆでにすると冷めても皮にしわが寄らず、茹で上りがきれいです。さやごと網焼きにすると中で蒸し焼きになり、うまみが増します。ぜひこの旬の時期にいかがでしょうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

令和６年４月５日発行

有限会社　幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204　本宮市糠沢字八幡 1-1
電話　0243-44-3816

<後記>みなさま、お花見の予定はありますでしょうか。花粉と黄砂なども、つらい時期ですが外で桜や春の花を楽しみたいですね。

（ほしの）

夢を見続ける男　NO１２０

「古事記」神話についてⅠ

これまで歴史ものを書いてきたが、今回は神話時代まで遡ってみたいと思う。２月１１日は建国記念日でしたが、これも「古事記」の神話時代（初代神武天皇の建国）にまで遡ると、皇紀２６８４年となる。今年は西暦で２０２４年だから、大部古い建国の話となる。古事記は奈良時代の７１２年に編纂された我が国初の歴史書である。内容的には、現代からみると神話とされるが、語り継がれてきたものであるから、単なる作り話ではなく、日本民族の願い或は理想とするものが神話に託して語られているのではないかと思う。
今回は古事記で語られている神話のうちいくつかを拾い上げて紹介してみたい。参考にしたのは、坂田安弘氏の著書「読み解き・古事記」である。著者は古事記の神話記を「心の目で読み解く」という手法で解説しておられ、大変興味をそそる内容になっている。
それでは古事記神話をいくつか紹介してみたいと思う。神名はカタカナ表記とする。
古事記の構成は大きく括ると、国生み→出雲の国譲り→天孫降臨→神武東征・建国となっているが、今回は「国生み・神々の生成」の項について辿ってみたいと思う。

１．国生みの神話

登場する神は、イザナギノミコト（男神）とイザナミノミコト（女神）である。この二神は地上を司る国つ神で、天つ神（高天原の神々）の命を受けて国生みを行うのである。その命とは、「この漂っている国を、人が人らしく住める国として作り固めなさい」というものであった。この時、立派な矛（ほこ）を授けられたのである。そこでイザナギノミコトとイザナミノミコトは、天の浮橋にお立ちになり、天つ神から授かった立派な矛を海に刺し立ててぐるぐるとかき回した。すると海水は次第にコオロコオロと凝りゆき、海水から引き上げた矛の先からは、一滴一滴と塩がしたたり落ちた。すると矛の先からしたたり落ちた塩が次第に積もり固まって島となった。これをオノコロ島という。日本列島である。生んだ順序は、最初に瀬戸内海の淡路島を、次に四国を、続いて隠岐島を、続いて九州を、さらに壱岐の島を、そして対馬を、それから佐渡島を、最後に本州を生むのである。ここでは日本の国土の起源が語られている。その頃は北海道の存在は認識されていなかったのかも知れない。国土の起源を神話に託して語るのは世界共通のようである。

２．神々の生成

国生みという大業を成し終えたイザナギノミコトとイザナミノミコトが心合わせて次に行ったのが神々の生成である。３５の神々が誕生する。これら神々の誕生は何を物語るのか。坂田氏は、古事記神話は独特の比喩表現を駆使しているとしてそれを説き明かしているので、それをお借りして紹介したいと思う。つまり、国生みをし終えた後、人が住み、生業をして生きる基盤を作り上げていく様を、神々の誕生をもって持って語らしていると みるのである。では、どんな具合なのか。順序を追って見てみたい。

―先ず、住居を定める―

①オオコトオシオ：国生みの大業を成し遂げた喜びを表す
②イワツチビコ：家宅を表わす六柱の神の１神で、イワ(岩)とツチ（壁土）を司る神である。
　　これは家宅の基礎材料の主要部分を表している。
③イワスヒメ：この名はイワ(岩)とス(砂)で、家の土台に敷き詰められる砂を司る神を表している。
④オオトヒワケ：オオトは「大きい戸口」という意味である。
⑤アメノフキオ：フキは「葺く」で、屋根を作ることを意味する。
⑥オオヤビコ：オオヤは「大屋根」を意味する。
⑦カザモツワケノオシオ：大屋根が風で飛ばされないように置く重い物を意味する。

―次に、住居を海辺の河口に定め、治水灌漑の術を得て稲作へ―

⑧オオワタツミ：ワタは「海」を、ツミは「司る」を意味する。海の神が誕生するのだ。
⑨ハヤアキツヒコとハヤアキツヒメ：ミナト（河口）の神である。海辺の河口に定住する。
⑩アワナギ・アワナミとツラナギ・ツラナミ：海の波や河の流れを状況に応じて支配する。
⑪アメノミクマリ・クニノミクマリ：水を施し配る働きを意味する。つまり治水灌漑の術を得たことを物語っている。　「クマリ」は「配る」の意。
⑫アメノクイザモチ・クニノクイザモチ：「クイザ」とは水を汲むための器を意味する。
⑬シナツヒコ：風の神である。治水灌漑の術を得て、いよいよ稲作となると、風の平穏が欠かせない。そこで風の神の誕生である。
⑭ククノチ：「ククノ」は草木の立ち伸びる状態を示す。つまり稲の茎の成長を表わす。

—治水灌漑・稲作の術を得て、いよいよ居住地を山間部へ広げていくー
⑮オオヤマツミ：山の神である。「ヤマツミ」とは、山に住むという意味である。
⑯カヤヌツヒメ：野の神である。　人々の生活の範囲が海辺から山間部へ広がったのだ。
⑰アメノサヅチ・クニノサヅチ：「サヅチ」は坂や堺を意味する。坂を司る神である。
⑱アメノサギリ・クニノサギリ：「サギリ」は坂を登りつめた処を意味し、峠の神である。
⑲オオトマトイコ・オオトマトイメ：山のたわんだ場所、山の傾斜面を司る神である。

—稲作が広がり、流通（運送）させ、食が豊かになるー
⑳トリノイワクスフネ：水鳥の如く速く進む岩のように堅牢な楠で造られた船という意味の神である。「トリ」は「鳥」、「イワ」は「岩」、「フネ」は「舟」。
○オオゲツヒメ：「オオゲツ」の「ゲ」は「御膳」ということで、食物すべてを総称する神である。生産された食物が流通されるようになると、食が豊かになる。

—最後に、「火の神」を生んでー
イザナギノミコトとイザナミノミコトは力を合わせてこの世に文明を築き、最後に「火の神」を生む。火の神を生むということは、人間が自然界の生きものの中で唯一火を自由に操る術を手に入れたということを示す。しかし、「火の神」を生むということは、とてもすごいことで、イザナミノミコトは「火の神」を生んで大火傷をおって床に伏せってしまう。ここからが面白い。床に臥せっているイザナミノミコトからさらに次の神々が誕生する。
○嘔吐から「カナヤマビコ」が生まれる。この神は鉱山の神である。
○尿からは「ハニヤスビコ・ハニヤスビメ」が生まれる。田畑の土壌を守る神である。
○「ミズハノメ」の誕生：「水が足りる」の意で、灌漑の神であり、肥料の神でもある。
○「ワクムスヒ」の誕生：穀物がすくすく伸び行くという意で、農業生産が盛んになってきたことを表わす。

長々と神名をあげて書いたが、どうでしたか。この語り口をどうみるのか一幼稚でつまらないとするのか、何を伝えんとしているのかと見るか、人によって様々かと思います。
次回も神話の続きを紹介します。

茨城県 生瀬富士・ジャンダルム、袋田の滝、月居山

（百：日本百名山、◎：日本二百名山、○：日本三百名山、カッコ内の数字は標高）

【今回登った山】

第一駐車場（107m）から生瀬富士（なませふじ、406m）～立神山（たてがみやま、420m）～　月居山（つきおれさん、404m）周回。

茨城県久慈郡大子町にある袋田の滝を挟んで対峙する生瀬富士と対岸の双耳峰の月居山、大子アルプスの一角をなす山々。

3 月 25 日（月）

福島県の県南地方に住む山友Nさんに教えてもらった、袋田の滝を上から眺めるという、福島県矢祭町と接する茨城県大子町の山に出かけることにした。

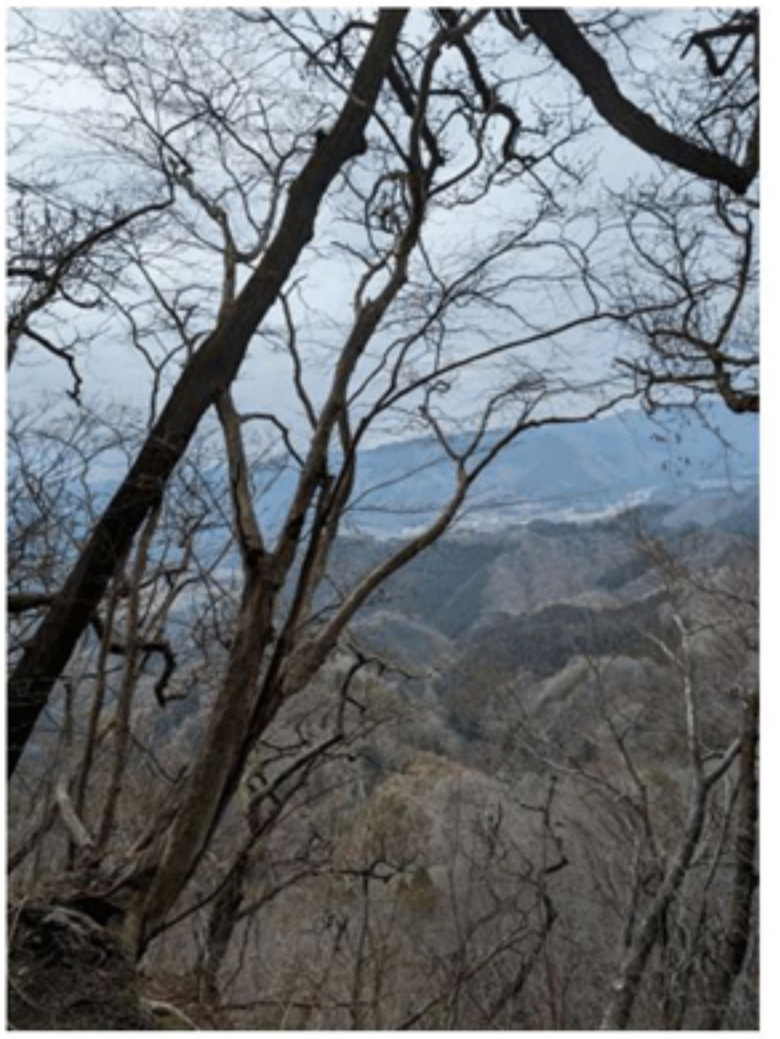
6時過ぎ自宅発、東北道矢吹ICから阿武隈高原道に入り矢吹中央ICで降り、棚倉町や矢祭町を経て茨城県大子町の袋田の滝を目指す。

8：20、無料の第一駐車場に止める。YAMAPの活動日記によると、前日の24日日曜日は第一駐車場が満杯になったらしい。

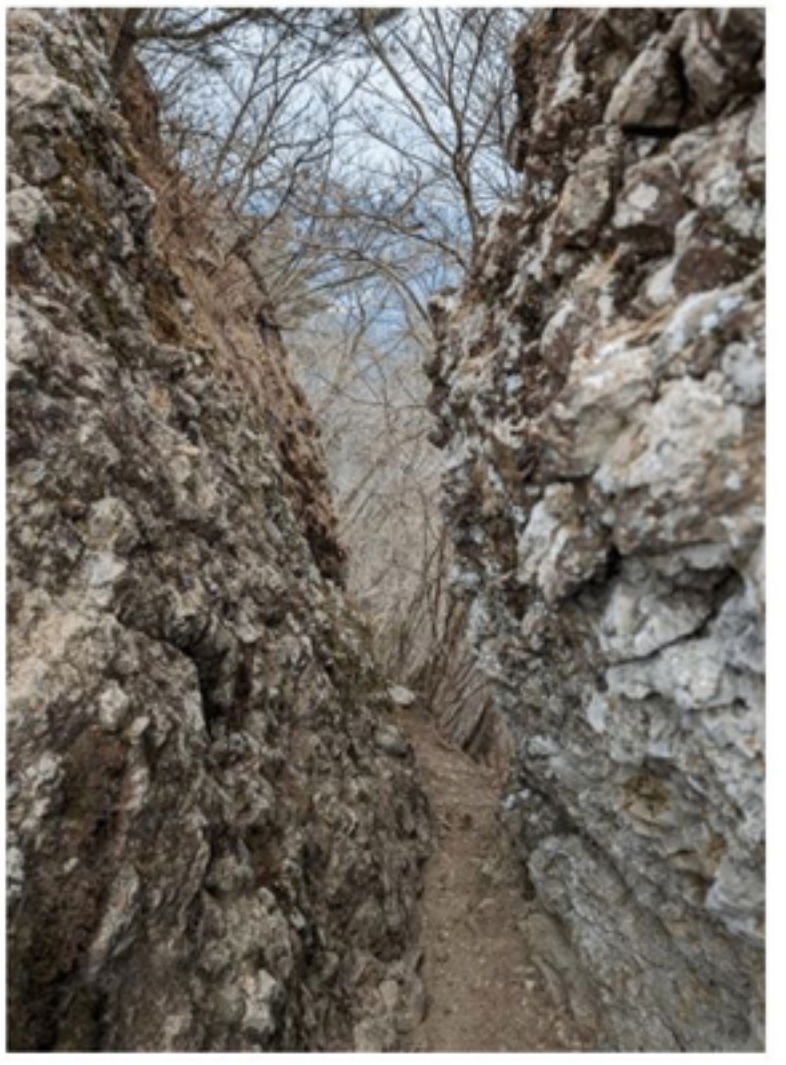
登ってみて分かったが、駐車場後方の双耳峰が月居山だった（写真左）。

8：45 出発、駐車場向かいの民家の間の道を進み山の道に入って行く（写真下左）。最初は傾斜の緩やかな道を登って行くがしだいに傾斜を増し汗ばんでくる（写真下右）。

岩場に突き当たりロープがあった（写真下左）。自分は踏み跡に従い、左に巻いて別のルートを進む。樹間から大子の街が見える（写真下右）。



岩を登った方が良かったかもしれないが、踏み跡は登れないことはないので進んで行く（写真下左）。岩と岩の間をすり抜ける（写真下右）。



9：55、生瀬富士山頂着（写真下左）。春霞の中、南方遠く筑波山（百 877m）と思われる双耳峰の山が薄っすらと見えるが、初めての山なので確とは同定できない（写真下右）。

北に延びるやせ尾根の岩稜をたどっていくと、茨城のジャンダルム（※）と呼ばれている岩塊の突端に行きつく。両側は切れ落ちていてスリル・高度感がある（写真下左）。

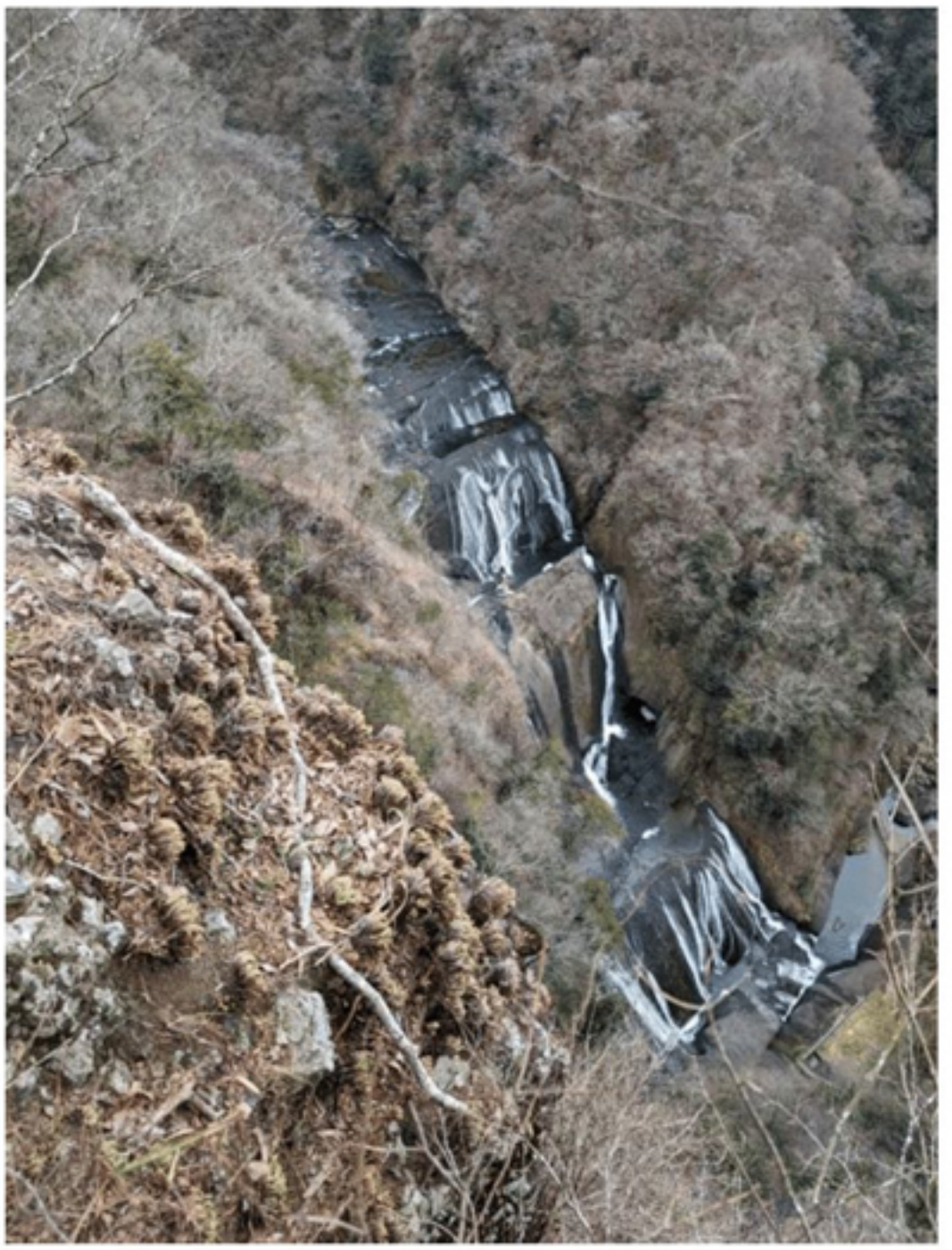
※ジャンダルム：北アルプス穂高連峰・奥穂高岳の西南西にあるドーム型の岩稜。標高 3,163m。

10：30、生瀬富士山頂を後にし、立神山を目指し、樹林の中を大きく下り登り返す（写真下右）。

立神山山頂着 10：51、特に眺望はない。基本的には下り基調だが小さなアップダウンを繰り返し「滝のぞき」に達する（写真左）。
柵も何もない崩れ落ちそうなところで怖い。40 数年前、袋田の滝（※1）を麓から見たことがあるが、たいして大きくない印象があり、とても日本三大瀑布（※2）の一つとは思えなかった。しかし、確かに上から見ると頷ける（写真下）。

（※1）：幅 73m、高さ 120m

（※2）日本三大瀑布：日光華厳ノ滝、和歌山県「那智の滝」



大子町観光協会によると、四季それぞれに見ごたえがあるとのこと。

・新芽の萌える緑に縁取られた 春
・涼やかな水しぶきが踊る 夏
・あでやかな紅葉が滝を彩る 秋
・厳しい寒さで滝が凍結する 冬

現在は、滝の鑑賞のために袋田の滝トンネルがあり、観瀑台から間近かに滝の迫力を感じることができるとのこと。

今回は“山登り”を主に考えたので、次の機会の時は観瀑台や吊り橋からの眺め、ハイキングコースなどを楽しみたい。

川の縁まで降りると川の渡渉が待っていた（写真左)、ここは袋田の滝の上流に位置する。看板に増水時は迂回ルートがあると書かれていたが、渡れそうなので渡渉する。渡った向かい側の建物には「奥の滝山荘」の表札があり鍵がかかっていて無人だった（写真下)。外で BBQ（鮎焼き？）などもできるようだ。車もあった。丁度 12 時を過ぎたところなので昼食休憩とした。ここが月居山の登り口にもなっていた（写真下左)。

12 時 30 分山荘出発。途中から舗装路と石の階段になった。

双耳峰の月居山には史跡がたくさんあった。渡渉地点から登った場合の手前のピーク、左の写真は水戸藩第九代藩主徳川斉昭（烈公）が天保五年（1834 年）に大子地方に巡村した時の歌碑（※）とのこと。

朱塗りの観音堂もあった（写真下左）。月居山光明寺観音堂。天台宗のお寺で大同二年（807 年）創建、運慶の作と伝わる聖観世音菩薩が安置されているとのこと。源の義家が永保三年（1083 年）戦勝祈願したことも記されている（写真下）。

鐘　撞堂もあり、ゴーンと三回撞かせてもらった。

下ったら、山門もあった（写真次頁上）。

（※）徳川斉昭（烈公）の歌碑：袋田自然研究路⑨、月居古城（築城は応永年間 1394 年～1428 年）の説明版には「佐竹家が出羽国秋田藩に移封されたとき（慶長 7 年、1602 年）代々佐竹家の家臣が治めていた月居城は廃城となった。

天保五年（1834 年）烈公がこの辺りを探勝し、月居山に登った時に歌った歌とのこと。
「尋ねれば 人は昔の 名のみにて 雲井の月ぞ すみわたりける」
・・・斉昭がこの辺りを探勝し、月居山に登ると折しも三日月が雲間にかかっており、この月を眺めて、はるか秋田の空に思いを寄せて読んだ名歌と説明されている。

上の写真の山門をくぐって手前に降りると鞍部になっていて、双耳峰のもう一つのピークへの登り口と下山ルート（至袋田の滝）の分岐になっていた（写真下左）。ここのピークが月居山頂と表示されている。
「ようこそ森林浴の道 奥久慈自然休養林へ」の看板もあった。カタクリが群生していたが花はまだだった。登って行くと大きな岩があり、ロープを使う。（写真下）。

登り切ったところは小広い広場になっており、月居城跡の立派な記念碑があり、昭和５８年（1983 年）に、移封前四代に渡って城主だった野内氏と月居氏一族（全国に居住）の浄財寄進によって建立したと書かれていた。１６０２年の秋田移封からすると実に３８０年

を越えて建立されたことになる。撰文は第３５代佐竹義榮となっていた。

14 時過ぎ下山開始。いったん舗装路に出て、再度山道に入るところが分かりにくく、舗装路を下っていった。

駐車場に至る手前の所からの生瀬富士（写真下）。中央奥の三角錐状の細い山が生瀬富士（406m）、右手前のお椀を伏せたような山が立神山（420m）と思われる。

15 時過ぎ駐車場着。休憩を含め約６時間半、袋田の滝を周回する山行を終える。標高が４００ｍ足らずながら、岩登りでロープを使ったり、茨城のジャンダルムのスリルを味わい、袋田の滝を上から眺めたり、渡渉したり、月居城跡の歴史に触れたりと面白さ満杯の山行だった。

今回は山登りがメインだったが、袋田の滝観光を主にしたハイキングも良いと思った。滝は季節ごとに趣が異なり、４０数年前よりも観瀑台ができたり吊橋ができたり施設の整備が進んでいるようなので、ぜひまた再訪したいと思った。

帰りは高速道路を使わずに一般道を北上するルートで帰宅したが 2 時間半を要した。往復２００ｋｍ。

令和６年４月　ＮＯ１２５　　アンチ・エイジング　山旅遊人